

大学 ジャーナル

FREE

vol.129 4・5月号
第23巻1号・通巻129号

発行所:くらむぼん出版 〒531-0071 大阪市北区中津1-14-2
TEL06(6372)5372 FAX06(6372)5374

E-mail KYA01311@nifty.com

大学ジャーナル
UNIVERSITY JOURNAL
ONLINE

http://univ-journal.jp



Highlight

特集 2025へ向けて

- 02 学び、考え、触れ合い、はじけた。
気づきと発見、自分を変えた5日間
桜美林大学 “ジブン”探究プログラム
- 04 シリーズ 大学が地域の核になる
京都文教大学の挑戦
- 05 連載 16歳からの大学論
哲子の相談室 雑賀恵子の書評
- 06 大学ジャーナルオンラインから
- 08 トピックス 2018SGH甲子園
16歳からの志望理由書トライアルのご案内
- 09 縦組み1から4面
第7回科学の甲子園全国大会特集

eポートフォリオについての関心が高まる中、高校教員向けのセミナーも盛んに行われている。その一つ、2月27日に行われたNPO学校支援協議会(東京都)による「課題研究とeポートフォリオ研究会」(於:大妻女子大学)には、都内中心に私立高校の校長や進路指導担当者ら100名が集まった。講師は一般社団法人 Glocal Academy理事長の岡本尚也、グローバル・リンク・シンガポール日本事務局長の植木和司郎、東京学芸大学教授 森本康彦、関西学院大学高大接続センター次長 尾木義久の4名の諸氏。

岡本氏は「課題研究の学習意義とその効果的学習方法」と題して、次期学習指導要領の目指すところやその下での評価の在り方について、目玉とされる課題研究を中心に語った。その上で、新入試とeポートフォリオの関連にも触れ、「探求は20年前から重視されてきたが、今回は入試改革と結びついた点に注目したい。一般選抜においても調査書の重みが増し、志望理由書、活動報告書などが求められるようになる。探究はその結果よりも過程が重要であるため、その記録をポートフォリオ等にしっかりと残り、積み重ねることが重要」と付け加えた。

JTB植木氏は、課題研究、探求学習の国際的な発表の場であるグローバル・リンク・シンガポールの取組を紹介。英語による研究発表を通じ、ツールとして英語を使うことでの英語力の向上効果に言及。7月に開催される第5回目は前年の199名を大きく超える約400名の参加希望があり、申し込みを調整中。課外活動、体験型の活動に対する生徒・保護者の関心の高まりを感じるとコメント。

「高等学校の教育に求められるeポートフォリオとは」と題して講演した学芸大学の森本教授は、「21世紀型スキルなどに象徴されるように、主体性を前提とした教育観へのパラダイムシフトの中で、ポートフォリオ、中でもeポートフォリオは、日頃の学びを貯め込むだけでなく家庭学習も取り込めるなど、継続的なパフォーマンス評価に欠かせない。学習成果を引証づけるエビデンスとしてだけでなく、貯めること自体が自己評価やメタ認知につながるから、学習とその評価を促進させるツールとしても重要」。その上で、「出願書類とは一線を画すべきだとしても、受験生の学びのプロセスを見たい大学の立場からすれば、入試にも十分活用できる」と語った。

「主体性等分野」の代表大学の関西学院大学の尾木氏は、学力の三要素の評価が難しいとされる一般選抜においても、eポートフォリオに蓄積された情報を、各大学がアドミッションポリシーに沿って重み付け、点数化することで採点作業の時間短縮、負担軽減は可能ならず。JePは、民間事業者の各種eポートフォリオやSNSと連携し、「各大学が一人ひとりの生徒を見つめる入試」「公平性・客観性から多面的な評価に対する〈妥当性・信頼性〉(を重視する)入試」への転換をサポートしていきたいと語った。

なお2018年度に、「評価に利用」「参考、参照に利用」「情報収集のために利用」のいずれかの目的で実証事業に参加予定の大学は、4月17日時点で80大学にのぼる。また、JePは2018年度に委託事業が終了した後は、事業と連続性のある形で大学が主体となって運営する公益性のある法人への移行が想定されている。

2025へ向けて

学制改革以来と言われる教育の大改革が始まろうとしている。大学教育改革、高校教育改革、大学入試改革を三位一体で行う高大接続改革だ。当面は2020年度に新高1生が受験する大学入学共通テストに関心が集まるが、次期学習指導要領で学んだ(2022年の)生徒が受験する2025年度入試(2024年度に実施)へも、中学受験などをきっかけに、小学生を持つ保護者の熱い視線が注がれる。

今回の改革の発端の一つは、これからの少子化、グローバル化、AIの深化などに対応できる「生涯学び続ける力」をもった人材の養成にある。新たな高等学校学習指導要領は先生側の「何を教えるか」の視点から、生徒側に立った「何を学ぶか」「何を身につけるか」「どのように学ぶか」という視点に変わり、「どのように学ぶか」というテーマでは「主体的、対話的かつ深い学び」(いわゆるアクティブラーニング)や「探究」を採り入れる。

こうした学びの変化に対応して、大学入試は、知識に偏った一点刻みの学力試験から、知識や技能をどのように使うか(思考力・判断力・表現力等)や、主体的に学びに取り組む態度や、多様性を尊重する態度と互いのよさを生かして共同する力など(学びに向かう力・人間性)を含め、新たな高等学校の学びで育む学力の三要素を多面的、総合的に評価する入試に転換す

ることが求められている。

なかでも学力の三要素のうちの学びに向かう力・人間性を評価するためには、面接、グループディスカッション、プレゼンテーションを活用することが考えられるが、高等学校段階での新たな学びのプロセスや成果が蓄積されたeポートフォリオを活用したプロセス評価型の大学入試が目玉されている。

また、高校で始まる新しい学びである「主体的、対話的かつ深い学び」や「探究」の成果を何で評価するのは課題である。成果や日頃の態度の観察だけではなく、eポートフォリオに蓄積された生徒の気づきから評価することも考えられる。さらに、こうしたプロセスの蓄積は高等学校での学びの可視化につながり、学習評価やカリキュラムマネジメントなど高等学校教育改革にもつながるのではとの期待の声があがっている。

このeポートフォリオの構築が官民挙げて推進されているが、今号ではその一つ、昨秋スタートした高大接続ポータルサイトJAPAN e-PortFolio (JeP)について、その仕組み、目的や狙いなどを紹介する。

高校eポートフォリオの構築、導入が進む

その①
高大接続ポータルサイト JAPAN e-PortFolio が始動、新たな入試モデルの実証事業が始まる

JAPAN e-PortFolio (JeP)とは

取組のベースになっているのは、2016年から始まった文部科学省による「大学入学者選抜改革推進委託事業5分野」のうち主体性等分野※1、事業名「《主体性等》をより適切に評価する面接や書類審査等、教科・科目によらない評価手法の調査研究」。その概要については、「学力の3要素※2の《主体性等》をより適切に評価するために、教育委員会、高等学校等と連携し、調査書、提出書類や面接等を実践的に活用する方法、高校段階でのeポートフォリオとインターネットによる出願のシステムの構築、《主体性等》の評価尺度・基準の開発等を行う」とされ、JePはその中で、ICTを活用した入試モデルのプラットフォームと位置付けられる。

《高校生活の活動をeポートフォリオとして記録、振り返りができるポータルサイト》とされるように、生徒が直接アクセスし、個々のポートフォリオが作成できる(※ただしIDとPWは個人情報管理の観点等から学校単位で発行される)。記録できるのは、主体性等の評価に欠かせない探究活動の記録―課題設定の経緯に始まり、参考文献、実験、調査、論文、フィールドスタディ、プレゼンター、場合によっては大学研究室訪問の記録、各種コンテストへの参加記録や結果など―や、特別活動や部活動をはじめ、ボランティアなどの学校内外の諸活動、海外留学経験、資格・検定試験の結果などだ。ここで重要なことは、生徒が「気づき」を入力することにある。例えば、実験での失敗から、生徒は何に気づきを持ち、次の実験に向けてどのように取り組んだかという学びのプロセスが重視される(決して成功した成果だけが評価されるのではない)。

このように探究活動の記録を蓄積する



ことから、総合型選抜(これまでのAO入試)や学校推薦型選抜(これまでの推薦)でのプロセス評価での活用が期待される。また様々な活動を教員が承認する機能も付き、これまでの成果を評価する選抜にもおおいに活用でき、将来的には導入が検討されているデジタル調査書との連携も視野に入れられているほか、統一書式による大学入学者受け入れシステムへの進化も視野に入れる。また高校教員の評価が活かせるだけでなく、ビッグデータを活用することにより、高校教育改革の成果が可視化され、データに基づく改革が可能になると考えられている。

今なぜ、ポートフォリオ、eポートフォリオ?

ポートフォリオを使って学びや様々な活動を記録し、本人の振り返りや、評価・指導に活かそうという動きは、平成10年改定の《生きる力》を盛り込んだ学習指導要領にあわせて本格化し、これまで小・中学校

では数多くの実践を見てきた。しかし高等学校では、大学の入学者選抜の多くが学力試験の成績を中心に評価してきたこともあり、ほとんど普及してこなかった。ところが新入試では、難関国立大学の中にも学校推薦型選抜や総合型選抜の定員を増やすところが現れ、しかも受験生の多い一般選抜(これまでの一般入試)でも学力試験だけでは測れない主体性なども評価するようになることされたため、調査書のウェイトが高まるとともに、ポートフォリオへの期待が急速に高まった。ただ、新入試では大学側の選考に人手や時間がかかること、大学入試改革と連動した次期学習指導要領では調査書の記載内容が膨らみ高校現場の負担が増えるなどが予想されるため、ICT化への流れもあり、eポートフォリオ構築への動きが加速している。

※1 ほかに、人文社会分野(国語科)、同(地理歴史科、公民科)、情報分野、理数分野がある。
※2 知識・技能、思考力・判断力・表現力等、主体性をもって多様な人々と協働して学ぶ態度(学習指導要領では「学びに向かう力、人間性等」)。

学び、考え、 触れ合い、はじけた。 気づきと発見、自分を変えた5日間

大学入試改革に続いて高大接続に注目が集まる中、オープンキャンパスなどの機会を捉えて、高校生の主体的な活動や取組を応援しようという大学も表れ始めた。私立大学では珍しい学群制で、リベラルアーツ教育と専門教育を柔軟に学ぶことを特長とする桜美林大学。3年前に始めた「AO・推薦準備セミナー」が多くの高校生や高校教員に支持されていることを受けて、この春から「ジブン」探究プログラム」を始めた。この春から学長になられた畑山浩昭先生にその主旨や目的についてお聞きするとともに、その様子取材した。



桜美林大学 学長
畑山 浩昭 先生

学長は語る

桜美林大学の求める学生とは

この春から学長に就任し、学群の拠点化、グローバル化の一層の進展を改革の柱にすえています。国外からの学生募集も含め、アドミッション（入試）の改革も大きな課題です。

現在、文部科学省主導で進められている改革のひとつの柱は、従来一般的だった一回の学力試験の結果だけで入学を選抜するのではなく、受験生の意欲や適性、また高校時代の教科外の活動なども含めて選考する方法へ転換するというものです。入学を選抜するという発想から、入学許可を与えるという発想への転換と言いつてもいいかもしれません。

私は高校教育の現場経験もあります。高校の進路指導では、大学進学実績を重視し、学力試験の成績を少しでも上げることに力を入れるところが少なくあ

りません。生徒を少しでも偏差値の高い大学へ送りだす。その先にあるのは、公務員や大企業、ブランド企業への就職です。これはこれで否定すべきことではありませんが、私は高校のすべてがそうする必要はないと考えています。

大学においても同様で、本学のような独自の教育目標を持つ私立大学では、国の改革を待つまでもなく、18歳段階での教科の学力の完成度だけで選考する必要はないと考えます。むしろ、アドミッションポリシーを理解していることが確認できれば、あとは高校で取り組んだ学習、部活動や文化活動、本人の価値観などに目を向けることで、入学後の成長が期待できそうな生徒を入学させたい。さいわい本学には、入学から卒業までの4年間で大きく変わり成長する学生が少なくありませんが、彼らの多くは、高校時代、様々な活動に積極的にかかり、偏差値とは異なる自分なりの価値観を育んできた学生だからです。「受験、受験」で過ごしてきたわけではない。彼らは教員との出会いなどから新たな気づきを得ると、急に変わります。もちろん私たちは、一般的な意味で言うところの学力、勉強を軽視しているわけではありません。それどころか、入学してきた学生には、「学而事人」という、建学の時から大切にしてきた考え、つまり学んだことを人々や社会に役立てなければいけないことを語り、自らの学びを社会に還元するにあたっては、できるだけ高いレベルの知識、技能を身に付けた方が与えるインパクトは大きいと、学ぶことの大切さを熱く説きもしています。

「ジブン」探究プログラムとは

子どもたちが気づきを得て、変わり、成長するのは必ずしも中学や高校、大学への入学といった、大きなターニングポイントにおいてだけではないでしょう。それはどこで訪れるかわからない。そこでこの春から、高校生に様々な学びや体験を通して新たな気づきを得るとともに、これまで気づかなかった新しい自分を発見してもらおうという試みを始めました。名付けて「ジブン」探究プログラム」です。

本学ではすでに3年前から、自らの高校時代を振り返るワークショップを通して、これまでの学びや経験を整理し、次の進路先を選択する意味や理由を改めて自問しアウトプットする機会の提供を始

めました。この取り組みはこれまでに4千人以上が受講、大きな反響を呼びました。今回はそれを一歩進め、日常とは異なる環境下で、他校の生徒と学びや体験を共にする中で、自らの将来を考えるためのインプットの機会を用意しようと考えたのです。それは自分の生きる道を見つけるきっかけとなるかもしれませんが、もしかすると、学力の高さだけを競うのとは違う生き方の発見につながるかもしれません。

一連の大学入試改革の動きは、今や高大接続、高校教育改革へとステージを移しつつあります。そうした中で、いわば「学力の高大接続」とでもいうべきものの他に、「人間の成長の高大接続」というものもあっていいし、本学としてはそこにも力を入れていくべきだと考えています。

「ジブン」探究プログラムを見学

「ジブン」探究プログラム」は、春のオープンキャンパスたけなわの3月下旬、3月25日(日)～29日(木)まで、町田キャンパスとプラネット淵野辺キャンパスで、のべ5日間かけて開催された。3年前から始めた「高校生応援プロジェクト」の一環で、グローバル・コミュニケーション、ビジネスマネジメント、健康福祉、芸術文化の4つの学群がそれぞれ外部講師を招くなどして5つの体験プログラムを実施した。対象は高1、高2生。全国でもユニークな試みということで、神奈川や東京からだけでなく、静岡や長野、さらには広島などからも約150人が集まった。

グローバルイングリッシュプログラム [英語プログラム]

3日間
開催



グローバル・コミュニケーション学群が、教育・研究における包括的な連携協定を結ぶベルリッツ・ジャパン(株)の協力で行われたプログラムには、3クラス(1クラス約12～20人)40人の生徒が参加。3日間とも午前2時間、午後

3時間の時間割で、グローバル社会で欠かせないクリティカルシンキングや、プレゼンテーション技術を中心に学んだ。最終日にはポスターを制作、プログラムの最後には、3日間の集大成としてポスター発表を行った。

ビジネスマネジメント学群

2019年4月

新宿百人町に 新キャンパス開設 (予定)

JR山手線
新大久保駅
徒歩9分



NEW
CAMPUS

東京都新宿区百人町に新しいキャンパスを開設し、ビジネスマネジメント学群と大学院(一部)を移転する計画が進行中です。企業の第一線で活躍する講師による講義や長期インターンシップ。ビジネスの中心地・新宿で、企業と連携した実践的な教育を強化します。学生が主体となり運営する食堂やカフェ、イベントや展示会を企画・開催できるスペースなど、業界に特化した実習を可能にする専門設備。キャンパスすべてが学生の实習の場となります! 都心にある大学との連携により、学生たちの交流が活発になり、視野が広がります。

グローバルキャンプ [中国語プログラム]

3日間
開催



グローバル・コミュニケーション学群と、中国孔子学院本部と提携して設立した桜美林大学孔子学院が提供するもので、英語プログラム同様3日間開催で、時間割もほぼ同じで行われた。参加者は約25人。孔子学院の講師を中心に、中国に留学経験のある学生や中国人留学生も協力して、中国語のレッスンに加えて中国の切り紙を体験するワークショップや、中国からの留学生とタピオカミルクティなどを作るといった異文化交流を行った。ちなみに桜美林大学では18の外国語が学べるが、中国語は其中最も一番人気という。



ミュージカルワークショップ

3日間
開催



芸術文化学群の音楽専修が担当し、3日間に亘って朝から夕方まで行われた。教員に加えて、田尾下哲(オペラや舞台の演出家、4月からは桜美林大学 芸術文化学群 准教授)、塚田良平(音楽指導・ヴォーカルトレーニング)、RYOJI(ダンス・振付指導・演劇指導)といった実力派タレントが監修やコーディネーターとして加わった。オリエンテーションの

後は「ショービジネスの可能性」についての講演。その後は、ヴォーカルとダンスの基礎練習に力を入れた。最終日にはこのプログラムのためのオリジナル作品「ゼミ物語プロット」を、50人の参加者全員が2班に別れて発表。踊り終わった高校生たちの顔には、仲間とともに一つのことをやり遂げた達成感が溢れていた。

スポーツビジネスの世界を考える [トレーナー編]

1日
開催



健康福祉学群の提供で、特別講師にはロンドンとリオのパラリンピック日本代表トレーナーで、東京大会でも活躍が期待されている菊地孝明さんが招かれた。集まったのは、日頃部活動などでスポーツに取り組む18人。午前、トレーナーとしてスポーツビジネス界で活躍するために必要な知識やスキルについての「スポーツビジネスの世界(トレーナーとしての活躍)」を聴講。午後は「明日からできる毎日の身体のメンテナンス術」と

題して、部活動などですぐ使えるスポーツマッサージやリラクゼーションマッサージ、ストレッチを二人一組のペアで行った。

コーディネーターの健康福祉学群の若松健太講師は、「大学の授業の中で最もインパクトのあるものからヒントを得た。大学の次のステージである社会で求められる人間力や、人と協調する力を養うのに最適」と振り返る。

高校生チャレンジキャンプ

1日
開催



ビジネスマネジメント学群が提供するワークショップ。高校生にも身近なカフェについて、そのメニューや価格がどのように決められているかについて学んだ後、1チーム4、5人で4つのチームを編成。各チームで自分たちの店の経営についてアイデアを出し合った。その後、各店の売りやオリジナルメニュー、価格などをポスター発表。最後は各店の利益をコーディネーターの先生が発表、各チームの取り組みについても公表した。「情報をもとによく考えたか」「自ら動いたか」「話を聞き考えを伝えることができたか」の3つのキーワードを手掛かりに振り返りが行われた。



コーディネーターをした(株)採用と育成研究社の鈴木洋平さんは「グループワークにしたのは、仕事の多くは共同作業で、大学でも今後は増えていくと予想されるから。ここで大事なことはグループに貢献すること。チームが勝っても自分が貢献していなければ嬉しくない。苦手と思う人は、授業や部活、課外活動などを通じて日頃からそのことを意識すること。そうすれば社会で活躍できる人になる」。またビジネスマネジメント学群の教員からは「相手のあるビジネスには正解がない。そこがまた面白いところ。本学群に「経営」という名前をいれていない理由もここにある。来年からは新宿の新しいキャンパスでさらに刺激的な学びが経験できるだろう」と結んだ。

この「ジブン」探究プログラム、来年度はリベラルアーツ学群からもプログラム提供が予定されているとのこと。桜美林大学では近い将来、オープンキャンパスそのものを従来型のものから、今回のような、学びや体験の場を通して主体性や思考力、判断力を養うようなプログラムに移行するとともに、これまで2回に亘って多数の参加者を集めた「AO・推薦準備セミナー」のさらなる充実を図っていきたいとしています。

シリーズ 大学が地域の核になる—京都文教大学の挑戦

2017年度の地域連携学生プロジェクトを振り返る

地域に根ざし、地域に学び、地域の課題解決を目指す学生たちの自主的な取組を支援する「地域連携学生プロジェクト」。春に募集と選考を行い、2017年度は前年度から継続の3つのプロジェクトが採択された。6月のプロジェクト採択から、2月の成果報告会まで、活動期間は約1年間。それぞれ独自の活動を進めてきたプロジェクトの1年間の歩みを紹介する。

2018年2月、1年間の活動を通して、学生たちが学んだ事、プロジェクト活動の成果や課題をまとめて報告を行う「地域連携学生プロジェクト2017 成果報告会」が開かれた。当日は、選考にも携わった学内外の評価委員も招き、評価とコメントをもらった。報告会の内容を元に、3プロジェクトの1年間を振り返る。

宇治☆茶レンジャー



宇治市を中心とした京都府南部地域は、宇治茶の産地として知られている。このプロジェクトは、学生たちが宇治茶について学び、学びを通して知った宇治茶の魅力や楽しさを広く地域に発信する活動で、2017年度で8年目を迎えるベテランプロジェクトとして、学内のみならず地域での知名度も高い。2017年には新メンバーが多数加入し、「宇治茶を知るきっかけづくりの場を増やす」を目標に掲げて活動を進めた。毎年秋に親子を対象に実施している「宇治茶スタンプラリー」(宇治茶にゆかりのあるポイントをクイズに答えながら巡るクイズスタンプラリーで、1万人近い参加

者がある年も少なくない)や、中宇治地域のお茶屋を巡り、店主の話に耳を傾けながら店舗ごとのこだわりのお茶を頂く「聞き茶巡り」といった主催事業だけでなく、学内外の地域イベントにも積極的に参加。お茶を美味しく淹れるコツを伝えるワークショップや、観光シーズンに来訪者に宇治茶を振る舞うキャンペーンなど、参加者とプロジェクトメンバーが直接的に関わる企画の実施にも力を入れた。2018年度も継続実施を予定しており、従来の主催事業のブラッシュアップと子どもたちを対象にしたワークショップの企画を検討している。

商店街活性化隊 しあわせ工房 CanVas

本学のサテライトキャンパスがある宇治橋通り商店街と連携し、商店街の魅力発信、認知度向上、立ち寄り客の増加など、まちの賑わい創出に取り組むプロジェクト。2017年度には、以前より実施している「宇治ロゲイニング」の定期的な開催と、商店街の店主さんとのさらなる関係作りに取り組んだ。5月、9月、11月にターゲットを絞り、それぞれの参加者に合ったロゲイニング(本誌124号参照)を実施し、2月には広く一般に募集をかけ、過去最大の参加者を集めることに成功した。また商店街の各店舗へのヒアリング調査を実施し、プロジェクトへの要望や商店街のニーズ把握

を行った。2018年度には、ヒアリング調査で伺った商店街からの要望や希望を少しでも実現できるよう活動方針を検討し、宇治橋通り商店街に必要とされる団体に育っていくようさらなる連携強化を進める。また、宇治市の西部エリア「小倉」で、新たな商店街組織「宇治小倉商店ネットワーク」が立ち上がったが、その主催になるイベントでスタッフを務めたり、会議、ワークショップに参加したりと、新たなエリアでの活動展開も始めた。市内の商店街同士が連携協力を進めるなかで、宇治橋通り商店街のみならず、宇治市内の商店街全体に目を向けた活動に期待が高まる。



響け! 元気に応援プロジェクト



宇治を舞台にしたアニメ作品「響け! ユーフォニアム」を通して地域とファンを繋ぐ取組を行っている。この作品は、宇治市出身の小説家 武田綾乃氏原作による小説をアニメ化したもので、2度のテレビアニメ化と2本の劇場版が制作され、2018年4月にはスピノフの長編映画「リズと青い鳥」、また年内に別の完全新作映画の公開も控えている。最初のテレビ放映から3年経った今も、物語の舞台である宇治を訪れるファンは多く、また新作映画の公開を機に新たなファンも増えてきている。この状況を捉えて、プロジェクトでは、2016年より宇治橋通り商店街にある本学のサテライトキャンパスにて、月に2回(第2土曜/第4

日曜)、定期的にファンが集える場所として「響け! 休憩所」を開設している。このような年間を通して継続的に実施する取組は、他のプロジェクトにはなく、評価委員からも高い評価を得た。しかし、休憩所のマンネリ化などが課題としてあげられており、新しいファンも気兼ねなく訪れられるような工夫をしていくことが、2018年度の取組の1つの柱となる。また、これまでも連携のある京阪電車や、作品のファンが結成した吹奏楽団などの他団体とのコラボ事業にも積極的に取り組んでおり、作品を応援する地域全体で、作品のファンから地域のファンを育てていく取組を進めていきたいと考えている。

地域と向き合おう、
地域で学ぶ、
学生独自の取組

16歳からの
大学論

第14回
その2

「探究型学習」に 逃げるな。

京都大学
学際融合教育研究推進センター
准教授 **宮野 公樹**先生

Profile
1973年石川県生まれ。2010～14年に文部科学省研究振興局学術調査官も兼任。
2011～2014年総長学事補佐。専門は学問論、大学論、政策科学。南部陽一郎研究
奨励賞、日本金属学会論文賞他。著書に「研究を深める5つの問い」講談社など。

最近、「探究型学習」が重視されているそうですね。読者である高校生のみなさんの学校でも実施されていることでしょうか。筆者は詳しくないですが、スーパーサイエンスハイスクール(以下、SSH)制度の波及効果ということでしょうか。生徒が何か課題を見つけてそれについて意見交換しながら答えを検討し発表をするという、研究に似た一連の活動を言うそうです。これはこれで結構なことだと思います。各々の関心や問題意識を基に調べまとめ発表するのは、いい訓練になるでしょう。

一方で気になることもあります。これは本当に「探究」なのかと。

何か対象を定めてそれについて調べ、まとめることは「調査」です。図書館で書物や図鑑、あるいはインターネットで検索すれば大抵のことはわかるでしょう。実験や観察という手法を導入しようが、教師がティーチャーではなくファシリテーターとして関与しようが、それはそれなりに調べ方や議論の仕方、発表の仕方といった「やり方」を学ぶには効果的でしょう。しかしこれに留まるのなら「調査型学習」と定義したほうが良さそうです。もちろん、調査型学習でも大きな意味があり確実な成果が得られることはありますが、探究という言葉を使っている以上、それはやはり探究であってほしいと思います。

では、調査と探究とはどう違うか。それは探究という言葉の字面が想起させるように「深いかどうか」ということになるでしょう。ちょっと調べてみると、ほんとうの探究型学習においては概念(コンセプト)を考えることが大事であるとありました。例えば、ある文学作品の人物描写について研究するなら、それを多角的に理解できたということに留まるのではなく、そもそも文学とは何かといったように、議論の抽象度を上げることが大事とのこと。その点において調査型と探究型は違うらしいのです。私はこれに同意はするものの、まだもの足りないと感じます。概念化することは「探究」とはやはり違う。個別課題についてその概念まで考えるというのは、抽象度が上がっただけ、議論を概念化させただけであり、「深く究める」のとは違うのではないかと。

では、「何が探究か」と言えば、私は「深く己の問いを究めること」としたいです。一般的に、何かについて知りたい、物事の本質について見極めたいとすれば、得られる知識はどんどん詳しく

なっていくと思われています。が、これは本質ではありません。知識が詳しくなっていくと言うよりも、問いが問いを呼び、それがどんどん連なって問いが根源に迫っていく…根源的な問いとはつまるところ、己はなぜ存在するのかといった、自分の生き死にに繋がるようなものです。そういう領域に達してはじめて、探究と呼べるものになるのではないかと思うのです。

そういう意味での探究は、中学や高校では無理!という声が聞こえてきそうです。しかしそう考えるこそが現在の探究型学習の重要な欠陥ではないかと思っています。ほんとうの探究…その領域で思考することは、長年に亘って人生をかけなければならぬことでもなければ、知恵熱が出るくらい考えつめなきやいけなくともありません。現在4歳の次男がいつも私に問いかけているようなこと、「おとうさん、宇宙は誰が作ったの?」といったようなことですから。

結局のところ、調査型学習だろうが探究型学習だろうが、日常的な授業だろうが、どのような学習においても、すべてこのような根源的な領域に通じるもの、あるいはしみじみとその普遍(=ものあわれ)に想いを馳せるものでなければ学ぶ意味はこれっぽちもないのです。いずれ死ぬ人間として、生(=存在)について考えることほど重要かつ実践的なものはないはず。「学ぶ」ということは本来そういうことであり、「学ぶ」ということがそのまま「生きる」ことなのです。学校の授業ないしは勉強が、受験のための暗記になりがちであったにしても、まるで自分をみつめるもう一人の自分のように、今暗記しようとしている内容は、実は自分やこの世の存在に繋がっているのだと感じ入ることができるなら、きっとそれは一生ものの素晴らしい学びであると言えるのです。

最後にもう一度繰り返しますが、日々の授業がそうでなくてどうしますか。探究型学習と名付けて何か特別なことをするよりも、日常が変わる方がより大切に実践的にまわっています。日々の講義がすべてほんとうの意味で探究であるよう、あるいはせめて少しでも探究の精神が匂いたつよう、教員は頑張るべきですし、学習者もまた、そのような教員、すなわち点数獲得や効率的暗記のテクニックの伝授に優れた教員ではなく、人生とはなんたるかを感じさせる教員を講じたほうがいいのではないかと(続く)。

連載
その11

哲子の相談室

日本文理大学特任教授
北岡 哲子



Profile

異分野から工学の世界に入り、感情・表情・脳と癒しをテーマに北岡オリジナル癒し工学を提唱。工学、医学、芸術、心理学、環境学、社会学、宗教人類学の学際研究に従事している。08年12月に日本機械学会計算力学部門に「癒し工学研究会」を設立。09年、東京工業大学において博士(工学)を取得。日本機械学会、日本感性工学学会、日本早期認知症学会、日本脳電位学会会員。2011年日本機械学会「癒し工学研究分科会」主査。東京工業大学大学院助教を経て、2015年4月より現職。他に自動車事故対策機構 自動車アセスメント等技術検討ワーキンググループ「予防安全技術検討ワーキンググループ」委員。著書は「癒しは科学で手に入る」(幻冬舎ルネッサンス新書)。2015年春からは、日経テクノロジーオンラインで「スポーツをテクノロジーする」を、電気新聞で「癒し工学の散歩道」を連載中。青山学院高等部出身。

大学入試と留学

相談 高校の1年生の女子です。特別、英語が好きというわけではないのですが、友人から、今後は入試のためにも留学しておくよと聞きました。なんとなく両親との関係もバツしないので家を離れてみたいし、楽しそうで、英語もすぐネイティブみたいになれそう、受験に有利なら一石二鳥かなと考えています。ご意見をお願いします。

回答 入試に有利になるかはケースバイケースだと思いますが、経験談をもとにいくつかの観点から意見を言わせてもらいます。

まず、留学によって得られるものは、他のことでも同じですが、本人の気持ちの強さによって変わるということを忘れないください。その上で、留学は環境を変えてくれますから、例えば家族との関係をリセットするにも一番健全なやり方かもしれません。また友だち作りは苦手だけれど、友人はたくさんほしい。だから引っ込み思案の自分をかえたい、変身したい、と言う人にとって大きなチャンスになるでしょう。

もちろん語学の壁や文化の違いなど、困難もつきものです。そこで以下では、留学経験が受験を含めたキャリアの中でどう活かすか、経験者の方に話を伺ってみました。

私立女子高の高校1年から2年にかけて10か月間、日本人のほとんどいないアメリカに留学し、3年間で高校を卒業。一般入試で進学した大学で再度留学、超人気の外資系企業に就職したばかりのAさん(女性)です。
*高校留学で英語が不自由なく話せるようになりましたか?大学受験でのメリットは?

もともと得意ではなかった英語力を上げたという留学しました。ただ受験したのは一般入試でしたから、他のメリットについてはわかりませんが、日本人同士固まっていたのは、留学の意味がないと思い、できるだけ現地の人と交流するように心がけました。おかげで英語に対する抵抗感がなくなりましたが、これが最大の収穫。高校時代の1年間の留学では、正直、社

会で通用する英語力は身につかないと思います。その後、大学受験に向けて英文法をしっかり学んだことが、TOEICの点数アップや、就活に大いに役立ったと思っています。

留学で得られるものは外国語の力だけではありません。ホストファミリーや現地の人との文化の差を感じたり、彼らとうまく折り合いがつかなかったりしましたが、それをどう受け入れていくかを考えるいい機会になりました。

*後輩の高校生に留学を進めますか?
留学は、人間としてたくましく成長できるチャンスです。ただ、やる気がない状態で行っても、行ったきりで終わってしまうと思います。留学することで自分は何を得たいのか、確固たるものでなくても、何らかの目的意識を持つていくことが不可欠ですね。

また、一度しか行けないのであれば、大学の留学を薦めます。授業ではレポート作成など、自分の考えをきちんとまとめる勉強が必要ですし、より高度な語学力が求められるので、必死に学ばなくてはならないからです。

目的意識がはっきりしているか、それを貫く意思が強くて行かざるを得ないか。海外に初めて出て、言葉も通じない、頼れる親もいないと、寂しさ、心細さから言葉が通じる人と仲良くなりたいのは当然。しかしそこで、「留学にきているんだから」と踏ん張れるかどうか。それが留学経験を実りあるものにできるかどうかの分岐点のようです。また彼女の言葉から、留学経験で得た力を帰国後も養っていくという姿勢は、大学入学後から就職に至るまで大きく影響することがわかります。そして彼女が最後に言っているように、大学入学後は、外国語能力を高めること以上に、自分の考えを述べる力が求められます。大学入試で評価されるかどうかはともかく、一番大事なものは、どのような目的意識で留学に行き、何を心得、それを大学や社会でどう役に立てたいかを考えることではないでしょうか(続く)。

このコーナーでは読者からの相談を受け付けています。お気軽に下記のアドレスへご連絡下さい。kitaokat@nbu.ac.jp

雑賀恵子の 書評

雑賀 恵子

京都薬科大学を経て、京都大学文学部卒業、京都大学大学院農学研究科博士課程修了。大阪産業大学他非常勤講師。著書に「空腹について」(青土社)、「エコロゴス 存在と食について」(人文書院)、「快楽の効用」(ちくま新書)。大阪教育大学附属高等学校天王寺学舎出身。



ビッグクエスチョンズ 脳と心

リチャード・レスタック(著)
サイモン・ブラックバーン(編)
ディスカヴァー・トゥエンティワン

あなたは、眠っている時どこにいるのだろう。もちろん、他者から見ればあなたの身体はベッドの上に横たわっている。だが、眠っているあなたはそれを知ることができるだろうか。知覚や随意運動、記憶や思考をつかさどる大脳が休んでおり夢も見ないノンレム睡眠時は意識がないので、そもそも「(自分)がどこにいるか」という問いは出てくるわけがなく、知る以前の状態だ。もし、このまま目覚めないとしたら、自分は生きているのか、死んでいるのかかわからない。眠ることはこの上なく気持ちがいいのに、こう考えると眠っている時は、(自分)がどこにもないという意味でいわば「死んだ状態」と同じと言えるかもしれない。そうすると、ずっと意識のない状態で横たわっている人には、経験を積むことはないのだから人生はないと断じてよいのか(多分、そうではない)。人生とは、経験の積み重ねによる記憶と意識の集積なのか。だが意識とは、身体と離れてあるわけではない。意識とは脳

が作り出したものだ。その脳は、体中に張り巡らされた神経系の中核であり、内部では物質が運動している。意識がなくても、身体は生きている。では、感情はどこから生まれてくるのだろう。心、というのはなんなのだろう。こうした素朴な問いは、実はとても難しいテーマであり、古来より考えられてきたし、現代では哲学や医学、動物行動学、心理学、物理学、ロボット工学などあらゆる方面に展開される。人間とは何か、という問いであるからだ。また、例えば俗に言う植物状態や重度の認知症の場合、主体というものがあるかどうか、受精卵の遺伝子操作の是非や胎児に人格があるかどうか、といった、医療倫理などが絡む現実の問題にも繋がってくる。意識や心とは何か、それが存在しているかどうか、ということか、ということを考えるには、考えるということそのものが意識であるので、つまりは自己言及のパラドックスが付きまとうので厄介だ。

神経科医の手になる本書は、いわゆる心-脳問題を多角的に、分かりやすく語ったものである。著者は、脳と心(そして魂)の探求に、20の問いを立てて取り組んでいる。心は体なしに存在できるか。脳はどのようにして生まれたか。感覚とはなにか。意識があるとはどういうことか。コミュニケーションに言語は不可欠か。脳の中の「私」とはなにか。知識とはなにか。共感や利他主義はどう生まれたか。愛とはなにか。機械は脳をダメにするのか…。
決定的な答えが、出されているわけではない。おそらく出されようもない。ただ、読者は「心」の不思議に改めて驚くとともに、進化の過程で「心」が生まれてきた意味に思いをはせるのではないかと。挙げられた問いを出発点として、人間について「あなた」が考えていくための手掛かりを本書は豊かに与えてくれている。人間について、そう、「あなた」について、だ。

実践女子大学、2020年東京五輪に向け全学的な取組みを開始



実践女子大学および実践女子大学短期大学部は、2014年6月に締結した東京2020オリンピック・パラリンピック競技大会組織委員会との連携協定に基づきオリンピック・パラリンピック連携事業推進室を設置した。

推進室の設置期間は、2018年1月から2021年3月まで。組織委員会や地域・企業、他大学等との連携ニーズを把握し、実践女子大学として企画・立案を行う。また、大学・短期大学部の学生・教職員、実践女子学園中学校高等学校の生徒・教職員による関連活動を支援する。

実践女子大学では、東京2020オリンピック・パラリンピック競技大会を、教育目標の「国際的視野」を育成する絶好の機会として位置づけている。学生たちがボランティアなど様々な形でオリンピック・パラリンピックに参画し、学修から得た知識・技能・態度を実践できるよう、学事日程の特別措置など全学的に取り組む。

オリンピックイヤーである2020年度の前期は授業開始を前倒して授業日数を確保。大会期間である2020年7月24日～8月9日、8月25日～9月6日の間は、原則として授業及び試験は実施しない。

また、ボランティアとして活躍しうる英語力獲得のため、1年次必修科目「Integrated English」で、日本の観光地の紹介、交通機関の乗り換え、道案内、日本料理の説明などができる英語力を身に付ける。

このほか、オリンピック・パラリンピックに関連するキャリア教育科目も設置。スポーツニッポン新聞社と連携し、オリンピック・パラリンピックについてメディアの視点から学ぶ「国際理解とキャリア形成」、近畿日本ツーリスト株式会社と連携し、ツアーリズムやボランティアを学ぶ「オープン講座a」、教育・文化の両面から、アスリート、文化人、関連企業、他大学など、多様なメンバーと共に創り上げる「オリンピック特別講座(仮称)」を開講する。

麻布大学が米ニューヨークなどで「ペットフレンドリーなコミュニティ調査」実施

麻布大学(神奈川県相模原市)地域社会研究室に所属する学生らは、文部科学省の私立大学研究ブランディング事業の研究活動の一環として、アメリカ合衆国ニューヨーク州とカリフォルニア州において「ペットフレンドリーなコミュニティ調査」を実施。現在、調査の分析を行っている。

調査は、大都市の住民にとって「ペット」はかけがえのない存在であり「ペットフレンドリーなコミュニティ」な環境が求められている一方、ペットに必要な運動を行う空間の不足といった課題があることを背景に実施された。調査期間は2017年8月23日～9月7日の2週間。地域社会研究室に所属する学生6名が調査員として参加し、ニューヨーク州とカリフォルニア州の3カ所のドッグパークにて、犬の飼い主119名から有効回答を得た。

今回の調査では、飼育に必要な施設として「公園」「広い空間」との回答が74%。ペット未飼育の人にとって「ペットフレンドリーなコミュニティ」のイメージは「公園」と言った回答が多かった。

回答者の半数以上が飼育年数0～3年と飼育経験が少なく、78%がペットを介した「ペット友人」がいると回答。「ペット友人」の45%が、互いに飼育の方法について話すなど、飼育知識の入手先としては「ペット友人」が32%と最も高かった。この結果から、ペットが地域社会とつながる重要な契機となっていることが分かった。

この研究の今後の展開としては、ペットフレンドリーなコミュニティ形成において、異なる利害を有する住民間の調整や合意形成が困難であるといった課題に対し、リードなし歩行をめぐる調整過程を探るなど、コミュニティ形成の具体的な条件と仕掛けについて具体的な事例を示したいという。

なお、私立大学研究ブランディング事業とは、2016年度より実施されている文部科学省による支援事業。学長のリーダーシップの下、大学の特色ある研究を基軸として、全学的な独自色を大きく打ち出す研究に取り組む私立大学・私立短期大学に対し、「社会展開型」および「世界展開型」のいずれかのタイプで選定。その研究に対し、文部科学省が経常費、施設費、設備費を支援する。



千葉工業大学が高校生を対象に「ロケットガール&ボーイ養成講座」を開催



千葉工業大学は、関東圏在住の高校生を対象とした、ロケットの設計から打ち上げまで全て、自分たちの手で体験する「ロケットガール&ボーイ養成講座2018」を2018年6月～10月上旬に開催。現在、参加者を募集している。

千葉工業大学では、2015年からこの「ロケットガール&ボーイ養成講座」を開催してきた。さまざまな高校から集まった仲間たちとチームを組み、ハイブリッドロケットの設計・制作、打ち上げまでを高校生たちの手で実現させる。制作技術はもちろん、高度で複雑なプロジェクトの管理の重要性やチームワークなどを学び、ものづくりの楽しさを体感することが目的だ。

製作するハイブリッドロケットは、火薬などは使わず、液体もしくは気体の酸化剤と固体の燃料を組み合わせる推進剤とするロケット。全長約2m、重量約10kgの大きさで、打ち上げ高度約900mへの到達も可能という。参加費、宿泊費は無料で交通費は自己負担。申し込み締め切りは2018年5月25日。

「ロケットガール&ボーイ養成講座2018」のスケジュール

- ・6月17日(日) キックオフ会(千葉工業大学 津田沼キャンパス)
- ・6月24日(日) モデルロケット打ち上げ体験(千葉工業大学 津田沼キャンパス)
- ・7月14～16日(土日祝) 製作合宿(千葉工業大学 御宿研修センター)
- ・9月9日(日) 打ち上げ直前報告会(千葉工業大学 スカイツリータウンキャンパス)
- ・9月下旬 or 10月上旬 ハイブリッドロケット打ち上げ本番(千葉県御宿町)

金沢星稜大学がジャンプチャレンジ企画の2017年度成果報告会を開催

金沢星稜大学(石川県金沢市)は、SEIRYO JUMP PROJECT(ジャンプチャレンジ企画)の2017年度成果報告会を2018年2月26日に開催し、全9団体が発表を行った。このプロジェクトは、「自分を超越する力をつける。」ことを目標に学生が主体となって、ボランティア・国

際交流・地域貢献・大学活性化などをテーマに活動し、資金の一部を大学が支援する。

SEIRYO JUMP PROJECTは2011年からスタートした金沢星稜大学独自の学生支援プロジェクト。学生が大学生活を充実させて、かつ社会に出る前に身につけておくべき能力を養うことが目的である。併設の短期大学部からの参加も可能であったり、教職員も連携しながら活動に加わったりと、大学全体の活気を象徴する取り組みとなっている。

成果報告会では、各団体に所属する学生たちが1年間の活動を通してどんな力を身に付けたのか、いかに自分が一人の学生として成長できたのか、どれほど有意義な活動になったのかなどについてプレゼンテーションを行った。

国際交流をテーマに取り組んだプロジェクト「世界の教室から」では、夏休み期間を利用し、学生らがカンボジアのフリースクールを訪問。「一人ひとりが自分を超越する海外研修」をテーマに、日本語教員ボランティアとして日本語の授業、子どもたちとの交流、現地文化講習などを行った。参加したメンバーは「慣れない環境下での生活を経て、行動力や団結力、対応力が身に付きました。」と報告した。

また、大学活性化をテーマに取り組んだ「Seiryu Courtyard Lunch Project」では金沢星稜大学のランチタイムを活性化させるために、学内の中庭に新たな移動販売車を誘致するなどの活動を行った。報告会では、全学生を対象に行ったアンケートを発表、「新規業者の開拓」や「価格の見直し」という課題についても報告した。

このSEIRYO JUMP PROJECTは2018年度も継続する予定で、新入生を迎え新たな活動が始まる。



「受験生が関心を持った大学」調査、早稲田大学が全ての地区で20位以内にランクイン

全国の受験生が関心を持つ大学は関東で早稲田大学、中部で名城大学が3年連続1位、近畿で関西大学が2年連続1位。テレメール進学サイトを運営するフロムページ(大阪市、森兼勝志社長)の全国一斉進学調査でこんな結果が出た。

調査は、フロムページが展開するテレメール利用者約49万人に2017年10月から2018年4月の間に調査内容を告知、4月からの進路が決まった人にウェブ上

のアンケートフォームで回答を求め、居住地地域別に関心を持った大学のランキングをまとめた。有効回答を寄せたのは4万5,333人。

それによると、北海道・東北地区は前年と同じ東北大学、山形大学、北海道大学の順で地元の国立大学がトップ3を独占した。関東地区は早稲田大学、明治大学、慶應義塾大学と有名私大が前年通り上位を独占している。中部地区も前年と順位が変わらず、名城大学、名古屋大学、南山大学の順だった。

近畿地区は関西大学、同志社大学、近畿大学の順で、前年3位の立命館大学、4位の神戸大学を抜いて近畿大学が3位に浮上した。中国・四国地区は前年通り岡山大学、広島大学の地元国立2校が1、2位を占め、3位に近畿地区の立命館大学が入っている。九州・沖縄地区は前年と同じ福岡大学、九州大学、熊本大学の順。

広域で関心を集めたのは早稲田大学で、6地区すべてで上位20位以内に入った。東日本では明治大学、西日本では同志社大学、立命館大学が受験生に注目されている。



東京大学が新入生を対象に「国際総合力認定制度」を導入開始

東京大学は、学生たちにこれからの大学生活を通じて、世界の多様な人々と共に生き、共に働く力(国際総合力)を身につけてもらおうと、前期課程新入生を対象に、2018年4月から国際総合力認定制度「Go Global Gateway」を開始した。

国際総合力認定制度「Go Global Gateway」とは、学生たちが、入学後の早い時期から世界を意識し、「国際総合力※」を身につけるために自分に必要な学びや体験を考え、大学生活を通じて、自らで決めたアクティビティに取り組んでいく制度。その取り組みが、国際総合力の基礎的な力を身につけたと認定されると、認定証が授与される。認定後

は、認定を受けた学生のみが参加出来る交流イベントや、短期留学プログラムなどの企画、海外渡航支援なども予定されている。また、制度への参加は、後期課程への進学や卒業要件ではないとしている。

参加方法は、まず、入学当初に卒業までをイメージして自己分析を行い、国際総合力伸長のために、自分のやりたいこと、やるべきこと、自分の将来像などを書くことからスタート。2018年4月30日までに、自分の行う取り組み「Go Global Statement」を提出する。

学生が取り組むアクティビティは、「外国語学修」「授業・コース=東京大学を含む日本国内で、母語以外により実施される教育プログラム」「海外経験」「国際交流活動」の4種類。これら4つのアクティビティのうち3つ以上に取り組む。活動後、国際総合力の5つの要素について、どれだけ身につけたかなどを書き、認定申請レポートを提出。その後、認定を受ける。

東京大学では、国際総合力認定制度を、単なる語学の堪能さや表層的な外国理解ではなく、異文化や他者について深く考える教養と洞察力を身につけるきっかけとなることを期待している。

※国際総合力とは、①コミュニケーションの力をつける②自信を持って挑戦する③自らを開き、多様性を受け入れる④他者と協働し、リーダーシップをとる⑤自己を相対化し、国際感覚をもつ。この5つの要素を指す。



目立つ医療、看護系 2019年度の学部・学科新設を文科省に申請

文部科学省は、3月末に申請があった2019年度開設予定の公私立大学学部、

学科の設置認可の可否を、大学設置・学校法人審議会に諮問した。2018年から18歳人口の減少が加速する中、医療や看護系の学部新設計画が多くなっている。

文科省によると、大学の学部設置は富山県立大学、名古屋女子大学など18校、大学の学科設置は名古屋産業大学、奈良学園大学など4校、短期大学の学科設置は宇都宮短期大学、目白大学短期大学部など5校、大学院の設置は横浜薬科大学、鳥取看護大学など4校、大学院の研究科設置は神奈川県立保健福祉大学、神戸女子大学など7校。

大学の学部新設のうち、富山県立大学、岐阜経済大学は看護学部、北海道医療大学は医療技術学部、高崎健康福祉大学は農学部、大手前大学は国際看護学部を設ける。

順天堂大学は定員240人の保健医療学部を新設するが、キャンパスが文科省告示で定員増を伴う学部新設が認められない東京23区内の東京都文京区であるため、特例としての申請になる。

短期大学の学科新設は札幌大学女子短期大学部がこども文化学科、仙台青葉学院短期大学が現代英語学科、八戸学院短期大学部が介護福祉学科、宇都宮短期大学が食物栄養学科、目白大学短期大学部が3年制の歯科衛生学科となる。

大学院の新設は亀田医療大学、鳥取看護大学が看護学研究科、湘南医療大学が保健医療学研究科、横浜薬科大学が薬学研究科を置く。



大学入試で高校生が利用したい外部検定は「英検」が9割

株式会社旺文社の教育情報センターは、大学受験ポータルサイト「大学受験

パスナビ」で、高校生および浪人生を対象に、大学入試で利用予定の英語の外部検定についてアンケートを実施した。

アンケートによると、回答総数1441人のうち、「英語の外部検定を入試利用する」と回答した人は651人。そのうちの約9割が「英検」を利用予定(一般入試89%、推薦・AO入試93.3%)と回答。他の外部検定では、「GTEC」は(一般入試12.8%、推薦・AO入試15.7%)、「TEAP」は(一般入試16.2%、推薦・AO入試6.0%)、「TOEIC L&RS&W」は(一般入試8.3%、推薦・AO入試10.4%)だった。

現在、外部検定利用し、入試を行っている大学では英検は9割以上の入試で利用可能(採用率94.4%)となっている。今回のアンケート結果には、この大学入試での汎用性の高さが影響していると思われる。大学側の採用率で、「英検」の次に高いのは、「TOEFL iBT 81.5%」、「GTEC CBT 81.5%」。

2020年度より、2018年4月入学の新高校1年生以降の生徒を対象として、センター試験にかわって、「大学入学共通テスト」が実施される。2018年3月26日には、大学入試センターが、共通テストで利用可能な外部検定を発表。認定を受けたのは、英検/TEAP/TEAP CBT / IELTS / TOEFL iBT / TOEIC L&RS&W / GTEC / ケンブリッジ英語検定の8種類となった。

英検においては、一次試験の不合格者が二次試験を受験できない「従来型」は、「1回の試験で英語4技能すべてを評価するもの」という要件を満たしていないということで不採用となり、「新方式」が認定された。「新方式」は、運営方法が異なるものの、問題構成や級認定、技能別スコア等は「従来型」と同様であり、各大学の独自入試では「従来型」も引き続き利用可能となっている。



日本の大学・教育関連専門のニュースサイト

大学ジャーナル

UNIVERSITY JOURNAL

ONLINE

その他の詳しい大学関連ニュースは

大学ジャーナルオンライン

SEARCH



@univjournal



大学ジャーナルオンライン

全国スーパーグローバルハイスクール課題研究発表会2018(SGH甲子園)in関西学院大学



2018 SGH甲子園に101校が参加

全国のスーパーグローバルハイスクール(SGH)、SGHアソシエイト校の高校生たちが取り組んだ課題研究の成果を競う「SGH甲子園」が3月24日(土)、関西学院大学西宮上ヶ原キャンパスで開催された(主催:関西学院大学、大阪大学、大阪教育大学、共催:早稲田大学、後援:滋賀県、京都府、京都市、大阪府、大阪市、兵庫県、神戸市、西宮市、奈良県、奈良市、和歌山県、和歌山市の各教育委員会)。文部科学省大学入学者選抜改革推進委託事業(1面参照)の一環で、昨年度に続く2度目の開催。集まったのは北海道から宮崎県まで101校の高校生及び学校関係者の約2,400人。全国のSGH校が集まる課題研究発表会としては最大規模という。

午前10時からの開会式に続いて11時から、生徒たちは「研究成果プレゼンテーション(日本語か英語)」(25チーム 5チーム×5会場)、「研究成果ポスタープレゼンテーション(日本語か英語)」(97チーム)、「ラウンドテーブル型ディスカッション(日本語)」(1テーマにつき6名、全3テーマ)の3部門に分かれて競った。

部門ごとに審査員によって選ばれた結果、プレゼンテーション部門の最優秀賞では英語は宮崎県立五ヶ瀬中等教育学校(テーマは「An ideal model of community bus service in aging society」)、日本語は関西学院千里国際高等部(テーマは「カンボジアの貧困層に医療を届けるための日本の非政府組織の可能性: Sunrise Japan HospitalとNPO法人Japan Heartの事例から展望を探る」)、優秀賞(英語)は東京学芸大学附属国際中等教育学校、日本語は宮崎県立宮崎大宮高等学校。ポスタープレゼンテーション部門の最優秀賞(英語)は千葉県立佐倉高等学校、日本語は京都市立堀川高等学校。優秀賞(英語)は法政大学女子高等学校(2018年4月より、法政大学国際高等学校)、日本語は順天高等学校。ディスカッション部門の最優秀賞は広島県立広島中学校・広島高等学校谷典典(たに とものり)さん。優秀賞は関西大学高等部梶山大誌(かじやま だいし)さんと富士見丘中学高等学校真田南(さなだ みなみ)さん。審査員特別賞は広島県立広島中学校・広島高等学校齊賀 智子(さいか ともこ)さんだった。

この大会、今年度も平成31年(2019年)3月23日(土)に開催が決定している。詳細は甲子園ホームページ<http://sgh-koshien.jp/>



編集部からのお知らせ

いよいよ始まる、大学ジャーナル2018年度新企画

16歳からの 志望理由書 トライアル

無料

活動報告書 大学入学希望理由書 学修計画書...

何かと書くことの多くなる高校生のために始めます。

学校の先生や、塾・予備校の先生に見てもらう前に、まずお試しを!

テーマ自由、以下の項目を参照に

- 大学で学びたいこと(大学4年間の学習計画、卒業後の展望)
- 高校で(課外のほか地域、家庭でもOK)取り組んでいること
- 世界や日本、地域に抱いている問題意識
- 大学で学ぶことを、社会でどう役立てたいか

『16歳の大学論』連動企画

単に添削だけではなく、「16歳の大学論」筆者他の真剣なアドバイスも。優秀作は誌面でも紹介

使用言語 日本語(英語も可)

字数・フォーマット、その他 800字から2000字

ワードテキスト(メール本文でも可)、原稿用紙、レポート用紙で。縦書き横書きは問いません

応募方法 メールまたはFAX

メールで送っていただく場合 kya01311@nifty.com

FAXで送っていただく場合 06-6372-5374(返送先を明記)

ワード版には見え消しで返信。FAX版には手書きで添削。ペンネーム可

電話でのお問い合わせは **06-6372-5372**

科学の甲子園全国大会

第一線の研究者・技術者4氏による特別シンポジウム
人工知能の時代を生きるサバイバル術

会場からは、たくさんのアイデア、質問も

各実技競技の1位は
次の通り。
実技競技①(トヨタ賞) 東京・筑波大学
校▽同③(SHIMA賞) 岩手・県立盛岡第一高
立藤島高校
DZU賞 福井・県立高知学芸高校、AGS賞 鳥取・県立鳥取西高校、学研賞 岐阜・県立岐阜高校、埼玉・県立埼玉工業高校、旭化成賞 福島・県立安積高校、アジレント賞 高知・海陽中等教育学校、



また、大会3日目に開かれた特別シンポジウムでは、4名のパネリストが、会場の高校生の声にもこたえながら、AI(人工知能)と人間の関係、AIの「これから」や「課題」などについて話し合いました。



山口 高平氏



野村 有加氏



古澤 明氏



吉田 直紀氏



AIが生活のさまざまな場面で利用されるようになった時、人間にはどんなスキルが求められるのかの問いに、AIを使って宇宙の成り立ちを研究する宇宙物理学者、吉田直紀東大大学院教授は「新しい疑問や魅力的な問いを提案する課題発見力」。量子テレポーテーションを使った量子コンピュータ研究の世界の第一人者、古澤明東大大学院教授は「変化に適応するためには幅広い知識と基礎学力が必要で、そのためには受験勉強頑張つて」と明快に答えました。また、日本アイ・ピー・エムでAI・ワトソンソフトウェアの開発に取り組み野村有加氏は自らの経験から「チームで問題を解決する力は社会に出てからも必ず役立つ。自分の『好き』を大切にしながら進路を決めて」とアドバイスしました。人工知能の研究40年で元人工知能学会会長の山口高平慶応義塾大学教授は「AIが未来社会の基盤になるのは確実。知識を活用して問題を解決する新しいAIを生み出すためにも、若い世代がどんな研究に参加してほしい」と呼びかけました。

大会最終日には「フエアウェルパーティー」が開かれ、高校生によるステージも催されました。なお第8回大会もさいたま市で開かれる予定です。

2019年4月、3つの新しい学びが始まる。

- 国際関係学部 国際関係学科
- 生命科学部 先端生命科学科 産業生命科学科
- 経営学部 マネジメント学科 3学科体制から1学科体制に再編します。

京都産業大学 経済学部 経営学部 法学部 現代社会学部 国際関係学部 外国語学部 文化学部 理学部 情報理工学部 生命科学部

入学センター 〒603-8555 京都市北区上賀茂本山 TEL.075-705-1437 https://www.kyoto-su.ac.jp

(※記事は現地取材及び科学技術振興機構のHP「科学の甲子園」などを参照しました。※写真提供/国立研究開発法人 科学技術振興機構)



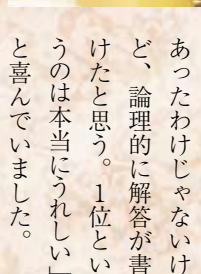
仲間を信じ 助け合う

科学の甲子園全国大会

実技②

光と色とエネルギー／5色のLEDが光るのに必要な最低電圧は？

「光と色とエネルギー」(同3人・同2時間)は物理からの出題です。青・緑・赤・紫・黄の5色のLEDを光らせるために必要な最低電圧を測ります。また、光を当てるとLEDが太陽電池のように発電することを確かめます。さらに光を貯め込み、暗くなると発光する蓄光シートに5色のLEDを当てると光り方がどう変わるかも確かめました。身近なLEDを使って光と色とエネルギーの関係を考察し、光のエネルギーが不連続であることに気付かせる課題です。1位は岩手県立盛岡第一高校で「自信があったわけじゃないけど、論理的に解答が書けたと思う。1位というのは本当にうれしい」と喜んでいました。



実技③

はばたけ！コバトン／優勝機は、40トルを無給電でひとつ飛び

事前に公開された実技③は「はばたけ！コバトン」ワイヤレス給電はばたき機レース」(競技者4人・競技時間2時間)でした。埼玉県の県鳥であるシラコバトをモチーフにした県の公式マスコット「コバトン」に見立てたはばたき機を製作し、ラインに吊ってレース(予選は30分、決勝は40分)を行い、所要時間を競います。はばたき機をすばやく進めるために羽根の形状やスピードを工夫したり、短時間で給電できる受電コイルをつくることもポイントになりました。

事前に公開されていた。ただ、各校とも入念に準備を重ね、ゴールまでたどり着いた機体にはポリ袋の羽根のはばたきを推進力に替えたようなユニークなものもありました。

予選の上位8チームが出場した決勝は、予選1位の広島学院高校と6位の福井県立藤島高校が大接戦を演じましたが、給電せずに40分を飛び切る「コバトン」を製作した藤島高校が優勝しました。メンバーは「決勝は一発勝負なので、一か八か、リスクをとりましたが、結果的に良かった」と喜びを隠せませんでした。

事前に公開されていた

喜びを隠せませんでした



研究設備の充実した小金井キャンパス



法政大学の理系4学部

情報科学部

アイデアを情報技術で表現することにより、新たな価値を創造

コンピュータ科学科
デジタルメディア学科

生命科学部

「生命」「植物」「物質」の3領域に基づく最新生命科学を探究

生命機能学科
環境応用化学科
応用植物科学科

理工学部

世界のどこでも活躍できる
マルチな理工系人材を育成

機械工学科(機械工学専修・航空操縦学専修)
電気電子工学科/応用情報工学科
経営システム工学科/創生科学科

デザイン工学部

新しい文化を構築する
「総合デザイン力」を追求

建築学科
都市環境デザイン工学科
システムデザイン学科

※市ヶ谷キャンパス

TOPICS

法政大学の理系4学部は全て英語外部試験利用入試を導入
英語外部試験の基準を満たせば数学1科目で受験可能。
詳しくは本学入試情報サイトをご覧ください。

お問い合わせ 法政大学入学センター

〒102-8160 東京都千代田区富士見 2-17-1
TEL 03-3264-9300(直通)
PC) <http://nyushi.hosei.ac.jp/>

法政大学

法政入試 検索

全知力を傾けて難問に挑む



科学の甲子園全国大会

698校、8725人がエントリー 過去最多の学校数と出場者

科学の甲子園は「広げよう科学の輪 活かそう科学の英知」がキャッチフレーズ。全国から選ばれた高校生が一同に会し、科学の知識と応用力を競いながら科学好きの裾野を広げ、トップ層の力をさらに伸ばす目的で2012年に創設されました。今大会には、過去最多の698校から8725人がエントリーし、各都道府県の選考を経て、47校361人が出場を果たしました。

開会式では、選手を代表して山形県立米沢興譲館高校の嶋貫太一さんと金子のかさんが「私たちは、私たちの活動を支え、応援し

てくださった方々への感謝の気持ちを胸に、正々堂々さわやかに戦いぬくことを誓います」と宣誓しました。大会初日に科学に関する知識とその応用能力を駆使する筆記競技(360点)を、2日目に3つの実技競技(各240点)を行い、その合計点を競いました。

筆記 化学や物理など6分野の課題に挑む

筆記競技は競技者6人、競技時間2時間で、物理、化学、生物、地学、数学、情報の6分野12問に挑みました。例えば、数学の設問では、中華レストランで見かける回転する丸テーブルの模倣型を使い、そこに潜む

「鳩の巣原理」などの数理を考察しました。さらに発展させて論証とパズルの要素を含む問題も出題されており、模型という具体物を操作することで考えを深めてもらうことを狙ったものなのです。

設問には、教科・科目の枠を越えた融合的な問題も多く、得意分野の異なるメンバーが、チームワークを発揮してそれぞれの役割をいかに発揮できるかが競技の力となりました。

筆記競技では総合優勝の栄光学園高校(神奈川県)が最高得点をあげ、第1位の講談社賞に輝きました。

実技①

クラミドモナスと謎の粉末／光走性のメカニズムを探れ

「クラミドモナスと謎の粉末」(競技者3人・競技時間2時間)は生物の課題。クラミドモナスは、葉緑体を持った単細胞の緑藻類です。光に反応して移動する「光走性」という特性を利用し、クラミドモナスを集めるなどして光走性のメカニズムを探りました。さらに用意された3種類の藻類の正体を突き止める課題も出題されました。実験器具を正確に操作し、どんな色素が含まれているかを解明し、藻類を特定しました。

1位は筑波大学附属駒場高校で「チームワークを生かせることと実験に楽しく取り組めたこと」を勝因に挙げました。



都道府県名	学校名(カッコ内は出場回数です)
北海道	函館ラ・サール高校(初)
青森県	県立弘前高校(初)
岩手県	県立盛岡第一高校(6)
宮城県	仙台高等専門学校(2)
秋田県	県立秋田高校(6)
山形県	県立米沢興譲館高校(4)
福島県	県立安積高校(3)
茨城県	県立並木中等教育学校(2)
栃木県	県立宇都宮高校(7)
群馬県	県立前橋高校(初)
埼玉県	県立浦和高校(3)
千葉県	県立千葉高校(初)
東京都	筑波大学附属駒場高校(5)
神奈川県	栄光学園高校(7)
新潟県	県立新潟高校(6)
富山県	県立富山中野高校(5)
石川県	県立金沢二水高校(初)
福井県	県立藤島高校(6)
山梨県	県立甲府南高校(3)
長野県	松本秀峰中等教育学校(2)
岐阜県	県立岐阜高校(7)
静岡県	県立沼津東高校(初)
愛知県	海陽中等教育学校(3)
三重県	県立伊勢高校(5)
滋賀県	県立膳所高校(7)
京都府	府立桃山高校(初)
大阪府	大阪星光学院高校(3)
兵庫県	県立神戸高校(初)
奈良県	帝塚山高校(初)
和歌山県	智辯学園和歌山高校(5)
鳥取県	県立鳥取西高校(7)
島根県	県立松江北高校(3)
岡山県	県立倉敷天城高校(初)
広島県	広島学院高校(6)
山口県	高水高校(初)
徳島県	徳島市立高校(6)
香川県	県立丸亀高校(3)
愛媛県	愛光高校(初)
高知県	高知学芸高校(5)
福岡県	久留米大学附設高校(6)
佐賀県	県立唐津東高校(3)
長崎県	青雲高校(2)
熊本県	県立熊本高校(初)
大分県	大分東明高校(初)
宮崎県	県立宮崎西高校(7)
鹿児島県	ラ・サール高校(7)
沖縄県	県立開邦高校(初)

初出場は15校 膳所と智辯学園和歌山はセンバツ高校野球大会とアベック出場

- 協賛企業・団体 (50音順)**
- 旭化成株式会社 ● アジレント・テクノロジー株式会社 ● 株式会社内田洋行 ● 株式会社白田ファインモーターズスクール ● 三州製菓株式会社 ● サントリーホールディングス株式会社
 - AGS株式会社 ● 株式会社学研ホールディングス ● ケニス株式会社 ● 株式会社 ● スカパーJSAT株式会社 ● セントラル自動車技研株式会社
 - 社講談社(Rikejo) ● 一般社団法人埼玉県経営者協会 ● 株式会社埼玉りそな銀行 ● 株式会社タムロン ● テクノプロ・ホールディングス株式会社 ● 日本エマソン株式会社 ● 公益社団法人日本理科学教育振興協会 ● パナソニック株式会社 ● 株式会社武蔵野銀行 ● 株式会社ヤガミ ● 株式会社UL Japan
 - CIEE(ETS TOEFL) ● 株式会社島津製作所/株式会社島津理化 ● 株式会社しまむら ● 帝人株式会社 ● トヨタ自動車株式会社 ● 株式会社ナリカ ● 株式会社ハーベス ● プリタニカ・ジャパン株式会社
- 応援企業・団体 (50音順)**

第7回 科学の甲子園全国大会

初回から7回連続の出場で初の総合優勝を果たした栄光学園のメンバー



7度目の挑戦で初の栄冠

神奈川・栄光学園が総合優勝

大学ジャーナル

FREE

科学の甲子園特集

発行所:くらむぼん出版 〒531-0071 大阪市北区中津1-14-2
TEL06(6372)5372 FAX06(6372)5374
E-mail KYA01311@nifty.com

た。全国47都道府県代表の高校生たちが、学校対抗で科学の知識と技能を競い合った結果、神奈川県代表の私立栄光学園高校が悲願の総合優勝を果たしました。総合2位は私立広島学院高校(広島県)、同3位は筑波大学附属駒場高校(東京都)でした。栄光学園は、5月18日から米国・コロラド州で開催される「サイエンス・オリンピアド2018」に参加します。



第7回科学の甲子園全国大会(科学技術振興機構、埼玉県など主催)が、3月16〜19日の4日間、さいたま市のソニックシティとさいたま市の記念総合体育館で開催されました。



栄光学園は第1回からの連続出場で、第5回大会では総合2位に輝いた強豪校です。メンバーは2年生6人と1年生2人。将来は医学部やロボット工学のエンジニア、コンピュータ分野や物理系の研究職など全員が理系を志望しています。優勝できずに悔しがる先輩たちを見て「優勝できるとは思わなかったが、最善を尽くそう」と入念に準備を重ねてきたそうです。その努力が実り、筆記試験で1位、実技競技②でも2位に輝き、総合優勝を果たしました。



楽しめたことが勝因かもしれない」と喜んだ。他のメンバーも「わからない問題もあったけど、チームみんなが助けてくれた。優勝できて本当にうれしい」(大島啓吾さん・2年)▽「去年の大会も出場したが、本当に悔しい思いをした。今年は結果をだせてうれしい」(大嶋俊之さん・2年)▽「ベストを尽くした。優勝に貢献できてよかった」(狩野友博さん・2年)▽「メンバーは温かく手助けしてくれ、感謝している」(竹中涼さん・1年)▽「大会直前に別の大会で良い成績(地学オリンピックで金メダル)をとり、みんなを元気づけられたのが良かった」(田中匠さん・2年)▽「気の利いたことを言いたかったが、感激のあまり忘れてしまった」(永野寛さん・1年)▽「優勝できて本当にびっくりしている。みんなすごい」(吉開泰裕さん・2年)と喜びを語っていました。

優勝の喜び 「先輩の無念晴らせた 最善を尽くした結果です」

また、メンバーから「9人目の選手」とされた物理研究部顧問の塚本英雄教諭(50)は「大会に参加を希望した全校の20人から県大会の16人を経て、全国大会では8人に選抜。大会に出場した先輩たちが残したアドバイスも奏功し、競技に活かせるようにサポートしましたが、彼らにはこれからも伸び伸びと自分のやりたい研究を進めてほしい」と話していました。



2位

広島学院高校



3位

筑波大学附属駒場高校

『第7回 科学の甲子園全国大会』 成績一覧

競技・成績	学校名
総合優勝(文部科学大臣賞・CIEE/TOEFL賞)	神奈川・栄光学園高校
総合2位(科学技術振興機構理事長賞・UL Japan賞)	広島・広島学院高校
総合3位(埼玉県知事賞・埼玉りそな銀行賞)	東京・筑波大学附属駒場高校
総合4位(さいたま市長賞・武蔵野銀行賞)	茨城・県立並木中等教育学校
総合5位(日本理科教育振興協会賞)	和歌山・智辯学園和歌山高校
総合6位	福島・県立安積高校
総合7位	兵庫・県立神戸高校
総合8位	福井・県立藤島高校
総合9位	大阪・大阪星光学院高校
総合10位	岐阜・県立岐阜高校
筆記競技1位(講談社賞)	神奈川・栄光学園高校
筆記競技2位(内田洋行賞)	和歌山・智辯学園和歌山高校
実技競技① 1位(トヨタ賞)	東京・筑波大学附属駒場高校
実技競技① 2位(ケニス賞)	兵庫・県立神戸高校
実技競技② 1位(パナソニック賞)	岩手・県立盛岡第一高校
実技競技② 2位(ヤガミ賞)	神奈川・栄光学園高校
実技競技③ 1位(SHIMADZU賞)	福井・県立藤島高校
実技競技③ 2位(ナリカ賞)	広島・広島学院高校
企業特別賞(旭化成賞) 優れたチームワークを発揮した優秀校	福島・県立安積高校
企業特別賞(アジレント・テクノロジー賞) 実技競技①で優れた実験スキルを発揮した優秀校	高知・高知学芸高校
企業特別賞(AGS賞) 筆記競技で独創的な発想にもとづく解答をした優秀校	鳥取・県立鳥取西高校
企業特別賞(学研賞) 実技競技③で優れたメカ・デザインを開発した優秀校	岐阜・県立岐阜高校
企業特別賞(埼玉県経営者協会賞) 1年生を含むチームの中の優秀校	愛知・海陽中等教育学校
企業特別賞(しまむら賞) 実技競技②で優れた探究心と考察力を発揮した優秀校	香川・県立丸亀高校
企業特別賞(帝人賞) 女子生徒3名以上を含むチームの中の最優秀校	三重・県立伊勢高校